

「阿字観と菩提心について」

——特に「阿字観」に関する一考察——

布施 浄 明

〈論文要旨〉 我々真言行者が修行をするのは、真言密教最大の目的である「即身成仏」の境地を体得することにある。その修行方法として「観法」がある。この「阿字観」は修法の中枢をなすものである。この「阿字観」は『大日経』・『大疏』・『菩提心論』に見られる「観法」であるが、この『菩提心論』の中で「阿字観」の中枢を示す偈頌が『金剛頂瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』で説かれているものと同じであり、經典成立から考えると『毘盧遮那三摩地法』が最も古い儀軌であると思われる。今回はこの儀軌を中心に「阿字観」と行者の「菩提心」との関係を考察した。

【問題の所在】

真言行者が「即身成仏」を実現するためには最初に「菩提心」をおこすことが求められる。そして、次に各種の行法を行うことが必要である。即ち「月輪観」・「阿字観」・「五相成身観」などである。特に「阿字観」は日本に至って実慧僧都が弘法大師より伝授を受け『阿字観用心口決』を記し、これが基盤となり興教大師によって改めて注目され多くの次第類が出来大成された。これら数多くの次第を見ると胎藏界法が用いられているように見受けられるが、その内容からすれば金剛界系の儀軌類から構成されているのである。つまり、この儀軌類から「阿字観」を考察しないと、その本質を理解する事は出来ないのではないだろうか。そこで、これらの観法を修すにあたって、「菩提心」が堅固でなければならぬ。でなければ即身成仏の完成はないと考えられる。そこで本稿では「菩提心」・「阿字」・「阿字観」の関係を以下2つの観点から考察した。

①真言密教では成仏する過程で「菩提心」をどのように理解したのか？

②「菩提心」を開顯し悟りを得るには一体どうすればいいのか？

この2点の問題は、真言密教において成仏の構造はどのような過程であるのかを、行者が成仏の構造上本尊瑜伽として実際に「菩提心」＝「阿字」を観じる実践方法である「阿字観」を取り上げて考察する。そこでは従来言われてきたような『大日経』・『大疏』よりむしろ『金剛頂経』系儀軌類に見る「瑜伽観法」の全体構造の中で「阿字観」と「菩提心」がどのように拘わっているのか、特に「阿字観」に注目して『大疏』と『毘盧遮那三摩地法』を見ながら「阿字観」の本質を探ることを目的とした。

【本題】

初めに真言密教の成仏の過程に次のような説がある。『理趣釈』の巻上に

「如来因地にいまして、灌頂師に従って、三昧耶曼荼羅に入る。阿闍梨は弟子の身中の本有の如来藏性を加持し、金剛加持を發し、真言行を修する菩薩法器と成るを以て、則ち持明等、乃至伝授印可等の灌頂の階位を堪任す。此れを以て初因と為し、三密と四智印が相応するに由り、究竟じて三界法王主と成る。」（正蔵十
九・六〇七・中）

これは、行者が「菩提心」を發したとき、阿闍梨に従って灌頂を授かり曼荼羅壇に入ることが可能になる。その結果、行者は本有の菩提心（如来藏）を加持されて、真言行者を修することの出来る菩薩法器（即ち修真言行菩薩）になる。そして、三密（身密・口密・意密）と四智印（大智印・三昧耶智印・法智印・羯摩印）が相応した時に成仏が完成される。ここに「發心（發菩提心）——修行（本尊瑜伽）——灌頂——成仏」という構造が伺える。行者が「阿字観」を修すのは、「本尊瑜伽」のことであるが、この段階では「阿字観」を何回も繰り返し行じ

「阿字觀と菩提心とについて」

て、「菩提心」（自心）を開発することにより「即身成仏」が完成される。このような真言密教における成仏の構造をふまえて、その実践方法である「阿字觀」を見ていきたい。

そもそも「阿字觀」とは、自心に阿字を觀じることにより、諸法本不生の理を悟り、自心の仏性を開顯する菩提心觀である。「阿字」は菩提心の種子であると同時に理智不二一体の大日如来の種子であるから、行者がよく「阿字」を觀じれば如来と一体になり成仏につながるのである。このような「阿字觀」の典拠は『大日經』、『大疏』悉地出現品、『菩提心論』等に見られるが、初めに『大疏』における「阿字觀」について考察する。

『大疏』卷十一では、如来の為す「阿字觀」を金剛薩埵が「行者」として如来の説法を聞いている形式で説かれている。『大疏』住心品では、自心に諸法本不生際を自覺するその過程が説かれているが、『大疏』第七に、

「若し本不生際（阿字）を見る者は、即ち是れ実の如く自心を知る、実の如く自心を知るは即ち是れ一切智智なり、故に毘盧遮那唯だこの一字（阿字）を以て真言となしたもふ。」（正蔵三九・六五一・下）

と説かれていることから、『大疏』においてはこの「阿字」の一字に本不生際と自心とを知る事である。自心は一切智智であるから本不生際を見る者は、「阿字」を知ることである。

『大疏』卷十二に、

「復た阿字は是れ開口の声なり。若し阿の声無ければ即ち口を開くこと能わず。口若し開かざれば一切の字皆無し。是の故に阿字を以て一切字を種子と為す。若し阿字を離れては、亦成ぜざるなり。」（正蔵三九・七一〇・上）

と説いてある。人間が最初に言葉を発する時は「阿」の発音の口形である。そこから如何ようにも広がるので一切の始まりであり、本不生である。また大日如来の種子である「阿字」を觀じることが「阿字觀」であり、後に成就につながる。又、阿字義の一つである一切智智について、『大疏』卷十一に、

「謂く一切智智の心は空に等しくて無垢、無量、無碍なり、分別あることなし、即ち是れ諸仏の大空現証の法なり。」（正蔵三九・六九一・上）

とあり、「阿字」は一切智智（自心）であり、空であり、無量であり、無碍であり、分別のない「本不生」である。この一切智智を悟ることこそ、如来の境界を知り得ることになる。つまり、「果」である如来の境地を得るには、行者に菩提を求める心が存在し、その心を発することから始まる。その菩提心は先ず、「白淨信心」から始まり、仏の境地を得られるとかたくなに信じることを「因」とし、次に、その行者の信心を如来の大慈大悲に加持せられ、「果」に方向づけられたことを支え、それにより行者本有の淨菩提心が清淨となることを「根」とし、そして、如来から行者に向けられている方便とが、三密相應すれば如来の境地（果）に入るのである。その如来の境地たるものは、一切智智であり阿字門で故に、行者は発心した後この「阿字」を鍛念に観じることが「果」を得るにあたいする。

そもそも「阿字」は胎藏大日如来（アビラウンケン）の種字であるが、この「阿字」について『大疏』巻十一に、

「この阿字は即ち是れ仏口なり、即ち是れ仏心なり、即ち是れ説者なり」（正蔵三九・六九四・中）

と説かれている。先に阿字義の一つ「一切智智」を示したが、ここではさらに「阿字＝仏心」と説く。阿字は如来そのものであり、仏心である。如来が阿字を唱えるのは、衆生を悟らしめる為の方便行である。しかし、胎藏大日如来の種字は「阿字」である傍ら、「阿克字」でもある。また、この「阿克字」は金剛薩埵の種字でもあることから、行者はこの金剛薩埵自身であると自覚することが必要ではないだろうか。これは次で述べることにする。さらに『大疏』巻十一に、

「故に十世界微塵の金剛菩薩を現じて、一一に真言門を以て衆生を引接して皆無為の果に至ることを得せし

「阿字觀と菩提心について」

むる是れなり」(正蔵三九・六九八・上一中)

とある。如来の境界である真言門にも段階があり、大日如来に代わって微塵の金剛菩薩が衆生を「果」に至らしめるのである。密教の成仏の構造を見る上で、『大疏』住心品で先ず「発心」があるが、そこでは行者は初地の位に入ることが得られ「真言門に入る」。そこからまた行が始まる。『大疏』卷十一に、二十種の成就の機を現している。即ち、

「①曼荼羅を見る。②尊に印可せられ、③真語を成就す。④菩提心を発す。⑤深信に、⑥慈悲あつて、⑦慳
 吝有ることなし。⑧調伏に住して、⑨能く善く縁に従つて生ずる所の法を分別し、⑩禁戒を受持して、⑪善
 く衆学に住し、⑫巧方便を具し、⑬勇猛にして、⑭時、非時を知る。⑮好んで恵捨を行じ、⑯心に怖畏無く、
 ⑰真言行法を勤修し、⑱真言の實踐に通達し、⑲常に座禪を樂い、⑳成就を作さんことを樂い」(正蔵三九・
 六九二・下一六九三・下)

と説かれている。これは、行者が「真言門」に入ってからの一々の成仏への構造を示していると共に、行の規定を説いている。最初の①～③は、『大疏』に、

「次第に修行すべし。法に随つて修行するが故に、阿闍梨の印可伝法を得。印可灌頂を得るが故に、次に真言成就と云う」(正蔵三九・六九二・下)

と説かれ、凡夫である衆生は、「発心」して、法に従つて行を積み重ねることにより、曼荼羅を見、灌頂を受け戒を授かることによつて成就が得られる。そこから改めて「阿字觀」を修する。これは、先に述べた『理趣釈』での成仏の構造に関連したものであると考える。

次いで『大疏』に、

「若し初学の人、心散乱して是の如く成ずること能わざるを恐るれば、當に直ちに種子の字を觀ずべし。」(正

藏三九・六九二・下)

これは、初めて「阿字観」を行じる者（灌頂を受ける器となり階位を授かった者）が、阿字門に入っていないものの、まだ阿字門の入口に留まっただけで十分に如来の境地を満喫していない状態である。そこで如来の種子（阿字）を何遍となく口に唱え、如来の行相を観じなければならない。そして⑧と⑨は、自性戒に住し、諸法の空性を悟る。『大疏』卷十一に、

「此の悉地の相は、自ら持誦者と及び本尊と真言と和合する因縁に由って、則ち一切不思議の事有り。」（正藏三九・六九三・上）

と説き、成仏するには様々な法の因縁、つまり本尊瑜伽を完成する為の三密行によって、本尊と行者の真言が一致する因縁によって成されるのである。

⑪と⑫は、「真言門」において学ぶ者は、方便を駆使しなければならない。それを、『大疏』卷十一には、

「如来の所有の方便は唯し是の如くの大事の因縁の為なり。若令い方便の諸乗の清浄戒を持せざるが為の故に、而も真言円満の行を防ぐといわば、此の理なし。」（正藏三九・六九三・上）

と説いている。ここに、『大疏』具縁品以下は如来の行を示していることが伺い知ることが出来、成就にあたり菩提心と同様方便も含有しなければならないのである。

⑬～⑯までは、実際に行をするにあたっての注意点とも言えるものである。⑬は『大疏』卷三の阿闍梨段に、

「勇健菩提心に住すとは、勇健はこれ雄猛にして、怯弱なきの義なり。此の心を須いる所以は、真言行者は未だ真諦を見ざる以来、當に違と順との境界ありて云々」（正藏三九・六二三・下）「六一四・上」

と説かれている。このように行者自心がまだ揺れ動いている段階では修学することは出来ず、行者の浄菩提心を阿闍梨が確固たるものにしなければならない。そして行者は能く行をして、⑭のように時間を惜しんで、⑮利

「阿字観と菩提心とについて」

他行を為し、⑯において無畏の心、無取着の心をもって正見の中に入る。ここに、『大疏』では、密教經典である傍ら大乘仏教の性質を明らかに受け継いでいることが伺える。そして⑰―⑲にいたって真言行法を修する。次いで、『大疏』に、

「所入の門より乃し成仏に至るまで、中に於て通塞の相善く分別して知る。爾る所以は此の諸の真言は即ち是れ如来自証の徳なり。…中略…若し一字に入るの時には、即ち無量門の功德を具して無二無別なり。」（正藏三九・六九三・中）

とある。発心して成仏に致るまで、行者の自心が如来の徳である「阿字」の一字に入るは、真言密教の実義に通達するものである。しかし、まだ自心は完全な成仏にはいたらない。『大疏』に、

「字を觀じ声と本尊と種子とを觀ずる如きは、一事に随つて心外縁せざれば即ち能く大成就を得。」（正藏三九・六九三・中）

「阿字」に本尊と声と種子とを觀じることにより、完全なる成仏になる。

こうした『大疏』における成仏構造を見ると、「発心―阿字門―修行―成仏」ということが見られる。特に「阿字門」における「阿字観」が、行者にとっていかに大切なものであるかが伺える。『大疏』卷十一に

「所謂阿字の自体本より以来無量の自在力不思議力を具足せり。此の悉地の体は常住不變なり。但し行人自ら了知せざるに由るが故に、是の如くの果を得ず。今此の行を以て其の身口意業を淨むるとき、若し能く法と相應すれば即ち自ら成就す。」（正藏三九・六九四・上）

「阿字」という一字に如来に境地を示し、無量の自在力が具足されており、常住不變なものである。その阿字を觀じて三密が相應するれば成就になる。先に『理趣釈』における成仏の構造を見たが、『大疏』においても同じ内容で説かれているのではないか。

『大疏』では、如来の大悲方便行により、行者がよく「阿字」を観じることが成就するのは、発心して初地の位を得ても、まだ煩惱が捨て切れず、真言門に入ってからこの煩惱と戦い、行をして、灌頂を受け、成仏の保証を得た後に「阿字観」を修して、真の成仏となる。その時「阿字」が「菩提心」そのものであり、それを基盤として能求の菩提心を展開して、所求の菩提心によって成就を得る。『大疏』は、「心」を中心にして、その展開を見ている。それを「如実知心」によって即心成仏を説くのである。自心を知るとは、先ず「自心」を「阿字」として観じ、それを鍛念に熟成することにより真の「阿字門」を体得するのである。「阿字」は大日如来の種子であり、如来の境地は諸法本不生際であるから、「阿字」を観じ成就を欲する者は、阿字本不生際を悟ることになるのである。

『大疏』卷十一は、「阿字」の義の効能と「阿字観」を修するによって成就を得るといった、言わば発心から成仏に至るまでの構造を説き示したものである。

【『毘盧遮那三摩地法』における「観法」について】

『金剛頂経瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』（以下『毘盧遮那三摩地法』（正蔵十八、三三七、上）は、金剛智三蔵が翻訳し、「五相成身観」、「道場観」、「正念誦」、「字輪観」を説いたものである。「阿字観」については、その理論的根拠とされる『菩提心論』の中で、「阿字観」の直接的典拠である「八葉白蓮一肘の間 阿字素光の色を炳現す、禅智俱に金剛縛に入れて、如来寂靜智を召入す」の部分で、この『毘盧遮那三摩地法』の文であると考え（經典成立には諸説あるが）、明らかに「阿字観」の典拠といえるのではないか。

密教における成仏の構造を見る上で、特に「金剛界」系の儀軌、或いは次第を見なければならぬ。先の『大疏』では、成仏の理論を、「自心」と「如来」とが平等であるとみて、「自心」の展開を説いているが、『毘盧遮那

「阿字觀と菩提心とについて」

『三摩地法』では、『大疏』で説く「阿字門」（菩提心を発し、次いで灌頂を受けてから以降）に入ってから、何をすべきかその方法を説いている。

即ち、初地の段階から真の仏果を得る為になすべき修行法である。それが、『金剛頂經』所説の、「五相成身觀」や「月輪觀」である。

従来阿字觀について、その典拠は『大日經』・『大疏』・『菩提心論』によるものであるとされているが、空海以降の成立である、実慧著『阿字觀用心口訣』においては、「阿字觀」は、金胎不二の行法として説かれている。

さて、この『毘盧遮那三摩地法』の初めには、

「…毘盧遮那佛の身・口・意の虚空に遍ずると、如来の三密門を演説せる、「金剛一乘甚深教」とに歸命したてまつる。我れ『瑜伽最勝法』に依つて、如実修行の処を開示せん。衆生をして眞實を顯し、頓に無上正等覺を証せしめんが為なり。弟子は菩提心を堅固にし、師に随つて已に灌頂の位を受け、妙に定慧を修して恒に觀察し、深く業用善巧門に入る」（正藏一九・三三七・上一中）

と説いている。その意味は、我々眞言行者が志す目標は、大日如来の境地である。その為に、菩提心を発し、されにそれを堅固にし、灌頂を受け、本来具足している仏性を開示するのが行であり觀法であるということである。それが『大疏』では、金剛薩埵が如来に質問する形で、阿字觀や三密觀などを為し、如来の智慧と大悲によつて自心を探索し成就していくのである。つまり、『大疏』で云う「行者」は金剛薩埵自身である。しかし、『毘盧遮那三摩地法』では、我々行者が金剛薩埵となり、如来の境地を体得する。いわば自心が金剛薩埵であるならば、先ずは、我々行者は金剛薩埵と一体であることを確実に知る必要がある。『毘盧遮那三摩地法』では、

「…行者次に三摩地を修して、跏坐し端身して、正受に入り、四無量心を以て法界を盡し、修習運用すること法教の如し。即ち普賢三昧耶に入れ。

體薩埵金剛に同なるが故に、定・慧和合して金剛縛にして、忍願の二度を建てて幢の如くせよ。

纔に本誓の印真言を誦すれば、身月輪に處して、薩埵に同ぜん……」（正蔵十八・三三八・上—中）

と、説いている。またこの真言は、「オンサンマヤ サトバン」である。この真言はまさに金剛薩埵と同体になる真言である。

「次に極喜三昧耶の印を結べ、此の悦樂を以て諸聖に契せよ。

忍願合掌に入れ、禪智・檀慧俱に伸べ立てよ。真言に曰く、

「オンサマヤ コク ソラタサトバン」此の妙印及び真言に由つて一切聖衆皆歡喜す。」（正蔵十八・三三八・中）

極喜三昧耶は「我身と仏と平等一体との妙觀に入ること」である。灌頂を受け本尊瑜伽が完成されればその時、行者は金剛薩埵の身になれる。

「次に當に心を開いて仏智に入るべし。怛羅咤の字を乳の上に想え、金剛縛を掣して心の前に當て、二字樞を転じて扇を啓くが如くせよ真言に曰く、」

「オン バザラ マンダ タラタ」（正蔵一八・三三八・中）

金剛薩埵の身となれば、いよいよ大日如来の仏智の境界に入る。

ここまで挙げた経文は、觀法を修する時の状態を説くと共に、その状態を維持して、この印真言を唱え金剛薩埵となり、如来の境地を体得する。またこの部分は「阿字觀」そのものを現しているのではないが、「觀法」を修すにあたっての基本的な事項を現している。我々行者自身が金剛薩埵であることの重要性が伺える。『理趣釈』には、

「金剛手菩薩（金剛薩埵）は、毘盧遮那の月輪中にあり、一切如来の菩提心を表し、行者が初めて菩提心を

「阿字観と菩提心について」

発し、金剛薩埵の加持によって普賢行願を修證して如来地を證するという。」（正蔵十九・六〇七・下）

と説かれている。行者が発心した時（菩提に心が向けられた時）、先ず金剛薩埵の加持され、如来地を得る。『理趣釈』にも行者が金剛薩埵になることの重要性が見られる。先の真言「オン サンマヤ サトバン」は、この一真言に成仏が完成される意義が含まれていると考える。

そして『毘盧遮那三摩地法』に、「阿字観」の軸である偈文（『菩提心論』の中で説かれている文）

「八葉白蓮一肘の間 阿字素光の色を炳現す、禅智俱に金剛縛に入れて、如来寂靜智を召入す。 オン バザ
ラ ベイシャ アク」

この頌は『菩提心論』の「阿字観」の典拠として引用されている。観法でいえば、この時点ではもう金剛薩埵と共同体であり、行者心中の月輪に八葉白蓮を観じることにより、煩惱がなくなり自性清浄となる。そこに「阿字素光の色」、つまり如来の大悲と智慧が加持されるのである。この真言[Om vajra avesā ah]は、オン 金剛（界曼荼羅）に遍入す。

という意味である。『金剛頂一切如来真実攝大乘現証大王経』

卷下 不空訳には、

「ただ願わくは一切如来加持し給へ、願わくは金剛薩埵に遍入し給へ。金剛の阿闍梨まさに薩埵金剛の印を結ぶべし。此の言をなすべし。」（正蔵十八・二一八・中）

行者—金剛薩—大日如来という「菩提心」を軸とした成仏への過程の中で、行者が「菩提心」をおこして（これを因とし）、最終的に「成菩提」（果）を得る為の行として「阿字観」をするのであるが、このように「菩提心」をおこした時、つまり「能求の菩提心」から、「所求の菩提心」に向けられ、金剛薩埵に加持され行者も金剛薩埵と共同体になる。これを因として、さらに「阿字観」を何回も修することにより「菩提心」が堅固になり、本尊瑜

伽が完成され、三界法王主となり得る。それが『毘盧遮那三摩地法』で説かれる「オン バザラ ベイシャアク
 〓金剛（曼荼羅）に遍入する」という意味につながるのであると考ええる。また、「アク」に注目すると「アク」は
 金剛界大日如来の種子である傍ら金剛薩埵の種子でもある。即ち『毘盧遮那三摩地法』では、行者がここで印真
 言を唱えることにより「金剛界に遍入す」は金剛薩埵に遍入すると考えられる。つまり、この場面で行者は金剛
 薩埵と同体であることを確認し、真言密教究極の「果」である「成菩提」（大日如来〓阿字）が自心に映し出され
 ることになる。如来の阿字を行者心中にある月輪中の阿字（菩提心）とが相應し仏心円満となることが「阿字観」
 である。これは三密観の内「意」にあたる。三密相應であるから真言を唱え、印を結ぶことによって如来寂靜智
 を体得するのである。

ところが、この真言の種子を見ると「ア」ではなく「アク」となっている。これは、胎藏大日如来の種子であ
 れば「アピラウンケン」の「ア」でなくてならない。金剛界毘盧遮那であれば種子は「バン」または「アク」で
 ある。また『菩提心論』では、

「阿字は菩提心であり、仏知見を開く」（正蔵三一・五七四・上）

とされる。そして、

「もし常に見れば、則ち菩薩の初地に入る。」（正蔵三一・五七四・中）

と説き、阿字を常に観じる者は初地に入るとされている。

今、『毘盧遮那三摩地法』では、灌頂を受けて金剛薩埵と同体になり、さらに進んだ修行を行じ、本尊瑜伽が達
 成されれば成仏するといっているのである。

それに比して、『大疏』で説く阿字観は如来の方便行であって、その極意を金剛薩埵が聞いている形であるか
 ら、初発心即得菩提というのは金剛薩埵の域になってこそ初めて得られるものと考えられる。ここで「アク」と

「阿字観と菩提心について」

しているのは、まさしく我々真言行者が金剛薩埵になったのである。また「阿克」は、『菩提心論』に『大疏』の文を引用している箇所を見ると、

「四には悪字短声、是れ般涅槃の義なり」（正蔵三九・七二三・中）

さらに、『法華経』の開・示・悟・入の四字に配して、「悪字」を「入」にあてている。

「入の字とは仏知見に入る。第四の悪字の如し」（正蔵三一・五七四・上）

と説いている。故に、「悪字」は、金剛薩埵の種子であると共に般涅槃（完全な悟り）であり、如来の智慧による悟りに入ることである。また、『金剛頂瑜伽略述三十七尊心要』不空訳に、

「無量微妙の音を発生するに一切の聖衆、聞者は歓喜せざるなし。諸仏の種子な悪字は能く一切如来の身心の中に遍入して、瑩けること明鏡の如し。」（正蔵一八・二九五・上—中）

とあり、『略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門』不空訳には、

「毘盧遮那は内心に於いて、金剛薩埵の勇猛の菩提心の三摩地智を証得す。自受用の故に、金剛薩埵勇猛菩提心の三摩地智より、五峯金剛を流出して、遍く十方世界を照らし、一切衆生をして頓に普賢の行を満足せしめ、還り来って一体に収まり、一切菩薩をして、三摩地智を受用せしめんが為の故に、金剛薩埵の菩薩行と成りて、阿如来の前月輪に住したまふ」（正蔵一八・二八八・中）

とある。これらの文から、行者は発心して自身の菩提心を堅固に、金剛薩埵（悪字）の勇猛菩提心の三摩地智を観じ、金剛薩埵と平等に成るのである。『毘盧遮那三摩地法』に、

「應に自身を知るべし。即ち金剛界となる。オン バザラ タマクカン」自身金剛と為んぬれば、堅実にして傾懷なし。復た諸仏に白して言さく、我金剛身と為りぬ。」（正蔵一八・三二九・上）

とある。これは、「五相成身観」の内、証金剛身の部分である。また空海著『即身成仏義』にも引用されている。

る。この段階において行者は確実に金剛薩埵になる。

以上のことから、「阿字」即ち菩提心の働きにより、展開し「悪字」によって「覚」になることと見れば、『大疏』所説の「阿字門に入る」は、到達地点の入口にすぎず、『金剛頂経』系儀軌類を見なければ、本質的な成就是不されないのであろう。ここに我々真言行者は「阿字観」もさることながら「阿克字」を觀じなければならぬのではないか。この偈文と真言は密教において重要なものである。

「行者、金剛定に入らんと欲すれば、妙觀察智の印を住せよ…中略…此の妙印を以て等引を修せば、即ち如来不動智を得ん」（正蔵一八・三三八・下）

とある。「五相成身觀」を為す前に、妙觀察智を修することによって如来不動の智慧を得る。妙觀察智とは、諸法を如実に觀察する智慧で、第六識より転じて此の智になる。また、大日如来の智慧を司る西方阿弥陀仏の智慧である。故に弥陀定印を結び阿弥陀仏と平等になり如来の智慧を以て法界の理を觀じる觀法である。この觀を作すのに、『毘盧遮那三摩地法』の最後に、

「若し修行有つて此の教に遇うて、昼夜四時に精進して修すれば、現世に歡喜地を證得し、後の十六生に正覺を成ず。」（正蔵一八・三三一・中）

とある。これは、空海著『即身成仏義』の四箇の証文にも引用されており、『毘盧遮那三摩地法』所説の觀法を為せば即身成仏が可能になるのである。

【総論】

以上のことから総論すれば、密教の成仏の構造（発心―如来藏性加持修行―真言行菩薩法器―三界法王―本尊瑜伽）から、行者が発心して『大疏』所説の「阿字門」に入り、如来藏性が加持されて、真言行を修すること

「阿字観と菩提心について」

に値する菩薩法器となり、自心が三界法王主となり、本尊瑜伽（ここでは「阿字観」を示す）が成就されたとき、即身成仏が完成されるのである。「菩提心」⇨「阿字」と「阿字観」との関係は、切り離して考えることは出来ず、菩提心がなければ成仏はありえない。故に行者は、発心して自心に「阿字」を如実に観じることを「阿字観」を通じて何回も修する事によって「菩提心」が堅固になり、その結果として成仏が完成される。理論的には以上のような段階が考えられるが、実際は、行者・金剛薩埵・大日如来という段階を考えるのであれば、「阿字観」を修する際に、いきなり「阿字」を観じるのではなくて、金剛薩埵の種子である「アク字」を自心に観じて、自ら金剛薩埵であることを自覚する。その上で如来の大慈大悲により、行者の「自心⇨阿字」と如来「阿字⇨本不生際」とが相応した時、即身成仏が完成されるのである。